

●春日部市民文化講座（第 19 回） 「千利休の侘茶の継承者、高山右近」

◆日時：2015 年 12 月 2 日(水) 11 時（ばばら春日部 4 階会議室）～12 時

■千利休の侘茶の継承者、高山右近

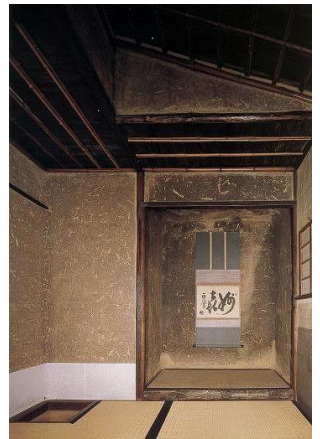
今日は、千利休と高山右近の侘茶の接点についてお話させていただきます。侘茶というものを考える時に「捨ててこそ」という言葉がずうっと私には響き続けています。侘茶とは何だと言われたら、本当に誤解されやすい言葉かも知れませんが最終的には「捨てること」ではないか思います。得ようとしている人たちの多い世間の中で、そぎ落としてスリムになっていくことが利休さんの侘茶であり、最終的には自らの命までも投げ出していく、そうした「捨ててこそ」だと思います。そうした利休さんの侘茶を、大変良く理解していた一人が高山右近であったと思います。そういうことから、千利休の侘茶の後継者の一人として高山右近を語りたいと思っています。

■堺の茶の湯と千利休

なぜ千利休が現れたのか、どうして戦国時代に大名たちが利休さんの弟子となって、こぞって茶の湯三昧に陥ったのか。一国の所領よりも茶碗一つのほうが欲しいと言った大名もいたと言われていますでしょう。じゃあ、**何で茶の湯がそんなに流行ったのか**という、それは殺伐とした戦国の世というものが大きかったのです。その頃の文化人とか、大金持ちとか、商人や武将たちは疎開してしまったのです。奈良や堺に逃れていたためです。その一人に有名な**武野紹鷗**という人がいたのです。武野紹鷗という人は、室町時代の書院の茶から四畳半の茶を考案した人です。当時の殺伐とした時代の中であって、心のゆとりが欲しいなあということで、数寄者の中でただひたすらゆったりとした時の過ごし方を工夫し、そこで飲食する茶室を設けたのです。その侘茶の基本形は四畳半だったのです。**利休さんになった時に武野紹鷗の侘茶でない、新しく大きな方向転換がありました**。それは、それまでは勝手ですることであって、ハレの場では行うことのなかった勝手仕事をもてなしの場に持ち出したことです。利休さんは、どうぞご覧くださいと言って、おもてなしの一番大切な所に囲炉裏をつくっちゃったのです。水指まで持ち出して、炭点前までもてなしの中に入れてしまったのです。普通は陰の仕事、裏の仕事だったものを、どうぞ見てくださいと、おもてなしの一つとしてハレの場に持ち出したのです。これは利休さんの利休さんたる凄さですね。

■本能寺の変は利休にとっての大転換点

利休さんが一番頭角を現したのが本能寺の変だと思うのです。本能寺の変で何が起こったかという、利休さんが一番ショックを受けたと思うのですよ。信長は納屋集が持っていた室町時代からの唐物を殆どと言っていいぐらい手に入れていたのですよ。そうした唐物を一堂に集めた品評会が本能寺の茶会だったのです。**本能寺の変で信長が亡くなり、みんなが大切にしてきた唐物がすべて無くなったのです**。一番困った利休さんは、「どうしよう」って考え。「じゃあ、造ろう。自分で造ろう」「おい、長次郎、こういう茶碗を作れよ！」と言って、**利休さんは唐物から長次郎が作った茶碗へと変わっていったのです**。そして、利休さんが長次郎に造らせたのは、皆さんが知っているあの温もりのある茶碗ですよ。このように利休さんは唐物から長次郎へ移っていったのです。その**時代的転換期が天正 10 年でした**。天正 10 年に本能寺の変があって、山崎の合戦で勝った秀吉が天下人の道を歩み始めた時に、秀吉の命によって利休さんは茶室を天王山の城に造るのです。それが、現在も残っているたった二畳の茶室、待つ庵と書く「待庵」です。



■二畳から一畳半の茶室へ

そして、利休さんは四畳半から三畳になって、三畳深台目になって、二畳から一畳半へと茶室を狭くしていったのです。その一畳半の茶室が完成したときに高山右近や蒲生氏郷に手紙を出して、「**おれ、一畳半を造ったよ**」って、これは何だと思います。これは、「捨ててこそ」でしょう。どんどん捨ててっているのですよ。ぼくたちは最後一畳半ですよ。ベッドか、今寝ている布団の一畳に横たわって看病を受ける者、半畳には看病する者が座って、最後を迎えるのです。

■全てを捨てた高山右近

一方、右近は九州島津征伐に行っている時に、突然秀吉から「**バテレン追放令**」が出されて、「**右近、俺を取るのか、キリストを取るのかどちらかにしろ**」と問われるとあっさりと「**キリストを取る**」と言うのです。3 回使者が立てられ、2 回目は利休さんが右近のところに行くのです。利休さんは右近のキリスト者として立場を理解するシンパだったのですが、右近の強い覚悟を知るのです。右近は命を狙われるかも知れないので、秀吉に明石城を返して浪人になり逃げるのです。家族も逃れますし、家来たちも浪人になってしまったのです。右近は博多湾の能古島(のこしま)に逃れ、そして小西行長の領地の小豆島に宣教師たちと一緒に逃れていったのです。でも、この頃は徳川

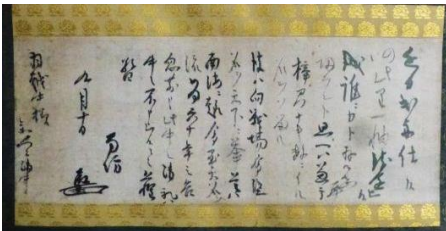
幕府ほど厳しくはなかったのです。秀吉は全部計算づくで、このくらいお灸を据えておけばいいだろうとゆったりとしていたのです。キリスト教は俺の天下に悪さをしないと考えていたのでしょうね。右近は小西行長に匿われて小豆島に行った後に、小西行長が島津征伐で得た熊本の宇土へ逃避行し、やがて前田利家の客将になるのですが、それを秀吉も認めるのです。その頃から彼が昔から願っていた右近という名前ではなく、「南坊」という号をおおっぴらに使うのです。この南坊は、南蛮坊主という彼のユーモアなのです。「俺だって宣教師のような生き方をしたいんだよ！ キリストに懸けたいんだよ！」と殿様と明石城を捨てて、全部捨ててすっきりとして金沢藩で前田家に仕えながら、侘茶に専心して教会を 3 つ造っています。実は、彼は前田利家とともに小田原攻めにも加わっていて、八王子の城を攻めたという記録があるのです。前田藩の重鎮になっていた訳です。娘は前田藩の家老の息子と嫁にいたりしています。

■侘茶の神髄は共栄

利休さんは「山姥文庫」を所持しており、人間が持つキリスト教における「原罪(original sin)」を理解した上で、本当にお互いに仲良くお茶を飲み、食事をして一献いただいて、今日も生きていて良かったねと、人間は歪んでいるけれども、割れているけれども、汚い心を持っているけれども、生きていていいんだよ。お互いにそれを受け入れ合おうというのが、茶室での一座建立なのです。これを今の流行り言葉で言えば、「共存」「共生」「共栄」です。でも、この世の中で共存でき共生できても、共栄はなかったのです。利休さんはあの戦国時代に共栄を確立したのです。共にあること、共に生きているその命を寿ぎましようというのが「共栄」で、それが侘茶の神髄だと思います。

■右近の茶の湯は修道

右近の茶の湯は修道だったのです。道を極めるためには厳しい厳しい己との闘い、そして決められたことをきっちりとするということです。だから、ロドリゲスは「小さな部屋に入って、右近はいつもそこで礼拝をしていた」と素晴らしいことを記しているのです。右近にとって茶室は礼拝堂、修道の場所であり、己を清める場所でした。神の目から見たら、自分はどうしようもないけれども赦されている。だからぼくは、「侘び」という言葉を英語で言えば「コンパッション」と置き換えます。「コンパッション」という言葉は「憐れみ」と訳されますが、憐みというのは共に苦しむということです。共に楽しむだけでなく、共に苦しむからこそ家族であり友人であり仲間なのです。共に苦しむということは、神の大きな愛であり意志であり心であります。だから、天の父が憐れみ深いようにあなた方も憐れみ深いようにしなさいというのがキリスト教の教えの根本なのです。侘びの世界のああいふものはただお互いの中で生まれたのではなくて、もう一つ次元の違うところからぼくたちの人間世界を見る中で生まれてきたのではないかと思います。



■高山右近と細川忠興の友情

これは高山右近の「日本訣別の書」です。書いたのは、家康から追放されて国外退去する時です。内容は、近々船が出て追放されるに先立って金沢から持って来た一つの掛け軸をどなたかに差し上げようと思案したが、贈る相手はあなたがふさわしい。彼(楠木正成)は戦場に向かい、戦死して天下に名を挙げましたが、私は今南海に赴いて、命を天に任せて

名を流す、みんなに忘れられるばかりです、という言い方をしているのです。私はこれまでの全てを一切切捨て、60年の苦しみはたちまち消え去ります。そして、この書状でぼくの胸に迫ったのは、「如何に」という言葉です。細川忠興に右近が「俺のこうした人生をどう思うか」と問いかける文章なのです。その時、利休さんの同じ弟子であった忠興は、小倉城にあって家康に言い寄って細川家を守る事に一生懸命であったのです。しかし、高山右近は何もないのです。ぼくはここにしばれているのです。実は、細川家の家記『綿考輯録(めんこうしゅうろく)』の中に忠興公というのが上下巻でありまして、その中に、「利休に結べし候 羽箒を高山右近がキリシタン国へ 渡り申し候まで所持致し その羽箒は 上羽はかなり良くて 中の羽などは 悪しきと仰せられ候」と忠興が言っていますよ、という文章があるのです。これを吟味してみますと、細川忠興は自分の親友の高山右近が長崎から船で追放される時に、小倉から密かに長崎まで行って見送ったのではないかと思います。それは自分が書いたのではなく、忠興が言っていたよという形で残しているのです。これっていい物語だと思いませんか。凄く感動的な物語だとぼくは思うのです。

■千利休と高山右近に共通するもの

利休さんと右近に共通していることは、利休さんは秀吉から「死んじまえ」と言われて切腹しましたが、首は晒されるのですが、そこに恨み辛みはないのです。右近に至ってもサラッとして、マニラに着いて 40 日くらいで死ぬのですが、最後に言っているのは「私は幸せです」って、利休さんが死ぬ直前に開いた茶会でくれた羽箒だけを持って…。

高橋先生の講話最後「羽箒は、清めの道具なのです」が高山右近を象徴する言葉でした。